

Z会東大進学教室

# 直前早慶大世界史

## 【2回目】



## 問題

### 【1】

#### 解答

ア 24    イ 41    ウ 16    エ 04    オ 08    カ 43    キ 09    ク 44  
ケ 33    コ 19

#### 解説

問題文はヨーロッパの軍事についての文章で、近世のヨーロッパに関する雑題である。些末な問題が数問存在するが、「基本事項に付随する内容」が、やはり含まれているのでテキスト・ノート・用語集の説明文を読むなどの対策を講じておいて欲しい。

ア・イ 羅針盤、活版印刷術、火薬は、宋代の中国で発明されたといわれる。それがイスラム世界を経由してヨーロッパに伝来して、一般にルネサンスの3大発明と呼ばれるようになった。羅針盤は、のちの大航海時代の幕が開ける技術上の重要なファクターであったし、また活版印刷術があったからこそ、ルターがドイツ語訳した新約聖書がドイツに普及したわけであり、問題文にある火薬以外の歴史上の意義も当然のことながら重要である。

ウ 百年戦争の戦いの中で、入試で問われる可能性があるのはクレシーの戦い(1346)、ボワティエの戦い(1356)、アザンクールの戦い(1415)、オルレアン解放(1429)の4つで、アザンクールの戦いは少し細かい事項になるが、それ以外の戦いはしっかりと定着させておく必要がある。イングランド国王エドワード3世(位1327～77)の王子エドワード黒太子(1330～76)が長弓隊を率いてクレシーの戦いやボワティエの戦いで勇戦したことは百年戦争の序盤のポイントである。イングランド軍の長弓隊の様子は、資料集の図版などで目にしたことがある人も多いだろう。

エ スペインのフェリペ2世(位1556～98)のネーデルラントに対するカトリック強制と、それに伴う重税や自治権の剥奪がネーデルラントの反抗を招いて、1568年にオラニエ公ウイレム(1533～84)を指導者として独立戦争が勃発した。オランダ独立戦争に絡む年代としては、独立戦争の開戦(1568)、独立宣言(1581)、スペインとの休戦(1609)、ウエストファリア条約(1648)の4つを押さえておきたい。

オ アントウェルペンには、①中世都市のフランドル地方の一都市として、まず高校の世界史に登場する。次に、②大航海時代における商業革命(ヨーロッパ経済の中心が地中海域から大西洋岸に移動した現象)で、新しく繁栄した都市である点が最大のポイントとなる。その後のアントウェルペンは、問題文にもある通り、1585年にスペイン軍の破壊・掠奪にあい、かつての繁栄が失われてしまう。そして、17世紀には、ネーデルラントの中心都市としての役割をオランダの首都アムステルダムに譲ることになった。

カ デンマーク、スウェーデン、ノルウェーの3カ国は、1397年にカルマル同盟を結び同君連合を形成していたが、1523年にスウェーデンが独立して解体する。以来、バルト海への進出および覇権の確立はスウェーデンの宿願となり、それを実現させたのがグスタフ＝アドルフ(位1611～32)であった。問題文にあるように、彼は新戦術を編み出して国力を増大させ三十年戦争に新教側に立って参戦し、リュッツェンの戦いで勝利した(その際グスタフ＝アドルフ自身は戦死してしまう)。その後、1648年のウエストファリア条約で、スウェー

デンは北ドイツの西ポンメルンを獲得して、バルト海に覇権を確立するに至る。

キ 「三十年戦争の講和条約」「オランダの独立が正式承認された」、という記述から容易に導き出せる基本問題。三十年戦争とオランダ独立戦争は、まったく別の戦争であると考えがちであるが、三十年戦争の地図を見てみると、三十年戦争の西部戦線で行われている戦争がオランダ独立戦争（1609年の休戦協定の期限が切れた後の戦争。もっとも1609年の段階でオランダは事実上の独立を勝ち取っている）であることに気づくだろうか。対立関係も、オランダ（新教徒）vs スペイン（旧教徒、ハプスブルク家）というように「新教徒 vs 旧教徒」という三十年戦争の構図と一致する。このような地図の見方ができれば、スイスとオランダの独立はハプスブルク家の領土削減に他ならないことも容易に分かるはずである。

ク もっとも細かい事項を問う問題。ルイ14世が、ヨーロッパ最強の陸軍を作り上げたことは重要事項であるが、そこからさらに一歩突っ込んだ問題といえる。ルーヴォワ（1641～91）は父ルネ＝テリエの後を継いでフランス陸軍の強化に努め、ヨーロッパ最強の陸軍の形成の功労者となった。

ケ プロイセンの国王、と聞いてすぐにフリードリヒ2世を思い浮かべた人が多かったと思うが、問題文では彼が「息子」になっているので、フリードリヒ2世の父親を解答しなければいけない。「フリードリヒ2世の父親」と「軍隊王」の異名をとったことの2点からフリードリヒ＝ヴィルヘルム1世（位1713～40）を導き出してもらいたい。フリードリヒ2世によるプロイセンの強国化は彼一代で為し得たのではなく、父であるフリードリヒ＝ヴィルヘルム1世の軍事力強化（徴兵制の導入など）が基盤となっていることは覚えておこう。

コ ナポレオンに対抗したプロイセンの改革で重要なのは、①農奴制廃止などの政治改革を行ったシュタイン、ハルデンベルク、②徴兵制導入などの軍の近代化を行ったシャルンホルスト、グナイゼナウ、③教育改革を行いベルリン大学の創設に尽力したフンボルト、④初代ベルリン大学学長となり、講演「ドイツ国民に告ぐ」でドイツ民族の愛国心を鼓舞したフィヒテ、である。これらの改革者について定着が曖昧な人は、必ず確認をしておくこと。

**【配点】**（計20点）

ア～コ 各2点

## 【2】

### 解答

問1 ① ジェームズ1世 ② ホップズ ③ 社会契約 ④ ボーダン  
⑤ 朕は国家なり ⑥ ボシユエ 問2 重商主義

問3 チャールズ2世、バロック様式 問4 アカデミー＝フランセーズ、リシュリユ

問5 カント、純粋理性批判 問6 ルソー、人間不平等起源論

### 解説

問1 ① ジェームズ1世は幼くしてスコットランド国王（位1567～1625）となったが、のちにイングランド王位（位1603～25）も兼ねることとなり、ステュアート朝を創始した。

②・③ イギリスの経験論哲学者ホップズは著『リヴァイアサン』の中で、各人の持つ自然権を、万人対万人の闘争を避けるため国家の主権者（国王）に譲渡し、各人は臣民として服

従すべきであると説いた。つまり、彼は社会契約説に依拠しつつ絶対主義を擁護したのである。

- ④ ボーダンが16世紀後半、フランスにおいて王権神授説を展開した思想家である。彼は、主権者（国王）は神の法と自然の法に従わなければならないが、実定法の範囲では無制限で法規を超越した存在であると主張し、絶対主義を擁護した。
- ⑤ “朕は国家なり”という言葉は、太陽王とも呼ばれるフランス国王ルイ14世（位1643～1715）の絶対王政を象徴するものとしてあまりにも有名である。
- ⑥ ボシユエはルイ14世に仕えて王権神授説を提唱したほか、フランス教会の教皇権からの独立（ガリカニスム）を説いた。

問3 イギリスでは、ピューリタン革命中に発足した科学者の私的団体“見えない大学”が王政復古後の60年に正式に学会となり、さらに62年にはチャールズ2世（位1660～85）の特許状を得てイギリス王立協会となった。

問4 ルイ13世（位1610～43）時の宰相リシュリユー（任1624～42）は1635年、アカデミー＝フランセーズを設立し、当時、各地方によって不統一であったフランス語の純化と統一を進めた。また、この機関に文芸作品を審査する役割をもたせ、文芸作品の創作・発表を奨励した。

問5 “汝自身の悟性を使用する勇気をもて”とは、ドイツ観念論哲学者カントの有名な言葉である。彼は、既成の伝統や社会を批判する啓蒙思想の影響を受け、独自の哲学を打ち立てた。カントの代表的な著作としては、1781年に刊行された『純粋理性批判』のほか、『実践理性批判』『判断力批判』などがある。

問6 フランスの思想家ルソーは『人間不平等起源論』（1755）や『社会契約論（民約論）』（1762）の中で、自由・平等な自然状態を賛美するとともに、既成の伝統や権力の一切を否定し、その思想はフランス革命に大きな影響を与えた。彼は、自然状態において個人の持つ権利はすべて国家に譲渡するという社会契約説に立つが、その権利は国家から市民的権利として譲り受け、人々は共同に形成した一般意志に従うべきだとした。さらに、主権は特定の個人ではなく全市民に属さなければならない、とする人民主権説を主張した。

【配点】（計24点）

問1 各1点 問2～問6 各2点

### 【3】

#### 解答

1 27    2 12    3 34    4 32    5 04    6 15  
a 04    b 02    c 02    d 05

#### 解説

- 1 新カント派は、19世紀末から20世紀初めにかけてドイツで活躍した哲学の学派で、唯物論に対抗し、当時進展した自然科学を重視し、カントの哲学に立ち返ろうとした。
- 2 生の哲学は、ヘーゲルや新カント派の理性主義や実証主義の科学的思考に対して、19世紀に興った哲学思潮である。代表的な人物にドイツのディルタイやフランスのベルグソン

(ベルクソン) がいる。

- 3 ドイツの哲学者であるフッサールは、「事象そのものへ帰れ」という標語の下に、現象学を提唱した。
- 4 シュペングラーはドイツの哲学者である。主著『西洋の没落』では、西欧文明の没落を予言し、西欧の自己中心的史観を批判して、他の各文化の固有性を強調した。
- 5 レヴィ=ストロースはフランスの人類学者で、構造主義を提唱して1960年代に流行した。主著『野生の思考』では、西欧のみにあるとされた論理や知性的思考が未開社会にもあることを示し、西欧の自己中心主義的認識論を批判した。
- 6 オーストリア出身のヴィトゲンシュタインは、主にイギリスで活躍した哲学者である。彼は分析哲学の形成と展開に大きな影響を与えた。
  - a 実証主義は19世紀のフランスに興った哲学思潮で、実際に確かめることのできる経験的事実のみを知識の源泉とし、フランスのコントによって創始された。彼は社会学の祖ともいわれ、ジョン=ステュアート=ミルやハーバート=スペンサーらに影響を与えた。
  - b 『歴史の研究』はイギリスのトインビーの著作である。マックス=ヴェーバーはドイツの思想家で、法学・経済学・歴史学・社会学などの分野で新しい見解を開いた。主著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』では、近代資本主義の起源を禁欲的プロテスタンティズムの中に見出し、資本主義社会における合理性と官僚制の問題を考察した。
  - c ヤスパースの主著は『哲学』『理性と実存』などで、『死に至る病』はケルケゴールの著作である。また、サルトルの小説は『嘔吐』『自由への道』などで、『異邦人』は実存主義作家カミュの作品である。マルセルの主著は『存在と所有』で、『第二の性』を著したのはサルトルの内縁の妻でもあるポーヴォワールである。
  - d 構造主義は、マルクス主義や実存哲学に対し、哲学・心理学・人類学などの分野において、「構造」あるいは「システム」という概念から把握しようとする立場である。フーコーはフランスの代表的な構造主義哲学者である。

【配点】(計14点)

1～6 各1点      a～d 各2点

#### 【4】

##### 解答

〔設問1〕 ① ゴーリキー      ② ショーロホフ      ④ ヘミングウェイ

⑧ オーウェル      ⑩ サルトル

〔設問2〕 ③ プレヒト      ⑤ トーマス=マン      ⑥ ゲルニカ      ⑦ アンドレ=ジード

⑨ ダリ

##### 解説

〔設問1〕 ① ロシアの作家で“プロレタリア文学の父”と称されるゴーリキーは、『どん底』などの作品でプロレタリア文学への道を開き、1905年にはロシア革命に参加した。

② ショーロホフは、赤軍に参加して各地を転戦した経験を基に、『静かなるドン』を発表し、世界的名声を得た。

④ 合衆国の作家ヘミングウェイは、第一次世界大戦での体験を基にした『武器よさらば』や

スペイン内戦を描いた『誰がために鐘は鳴る』を著し、「失われた世代」の代表的作家の一人とされた。

- ⑧ オーウェルはスペイン内乱で義勇軍に参加したが、帰国後、この時の内部闘争を描いた『カタロニア讃歌』を発表し、左翼の全体主義に批判的な立場を採った。未来小説『1984年』では全体主義政治の恐怖を描いた。
- ⑩ サルトルはフランスの哲学者・作家で、無神論的実存主義を唱えた。文学者の政治参加を説き、共産党に接近して行動する知識人の代表となった。  
〔設問2〕 ③ プレヒトは代表作『三文オペラ』で鋭く社会を風刺し、世界的に注目を浴びた。のちに共産党に入党し、ナチス時代には国外へ亡命して、反ファシズム活動を行った。
- ⑤ ドイツの作家トーマスマンは、1924年に『魔の山』を著してノーベル文学賞を受賞した。ナチス政権に反対して、のちに合衆国へ亡命した。
- ⑥ ピカソはスペインの画家で、ブラックらと立体派（キュビズム）を創始して現代絵画への道を開いた。1937年のパリ万国博覧会に出品された『ゲルニカ』は、同年4月、スペイン内乱に際してフランコ反乱軍を支援するドイツ空軍の爆撃によって焼き払われたスペイン北部の町ゲルニカを主題としたもので、戦争への怒りを訴えた大作である。
- ⑦ フランスの作家アンドレージードは、家庭・宗教・道徳・社会秩序の問題を描き、青年に人気を博した。1947年にはノーベル文学賞を受賞している。
- ⑨ ダリはパリで超現実主義（シュールレアリスム）運動に加わり、夢や潜在意識下にある精神内部を精密に描写する手法で評価を得た。代表作は「柔らかな時計」「内乱の予感」などで、版画・映画にも作品を残した。

【配点】（計20点）

〔設問1〕 各2点    〔設問2〕 各2点

## 【5】

### 解答

- 問① 審査法    問② ナントの王令廃止    問③ ウォルポール    問④ 1867年  
問⑤ アメリカ連合規約    問⑥ ジェファソン  
問⑦ 白人の小市民や農民の政治参加が本格化した。    問⑧ ストウ夫人  
問⑨ マッキンリー    問⑩ 急進社会党    問⑪ ブラント

### 解説

- 問① 1673年に制定された、公職就任者を国教徒に限定する審査法は、信教の自由という点で問題があり、1828年に廃止された。
- 問② 1598年、アンリ4世（位1589～1610）はナントの王令を発し、ユグノーに対して信仰の自由を認めたが、その後、信仰の統一をはかるルイ14世（位1643～1715）によって廃止された。
- 問③ ホイッグ党の政治家ウォルポール（任1721～42）は、議会内での支持者が少数となったため、国王が内閣維持を望んだにも関わらず辞任した。このことから、議会での多数党が内閣を組織し、議会に対して責任を負う責任内閣制が確立した。

- 問④ 1867年の第2回選挙法改正で参政権を得た労働者階級は、自由党を支持し、グラッドストーン内閣による労働組合法や秘密投票法などの実現を期待した。
- 問⑤ 1777年のアメリカ連合規約では、合衆国は独立した州の連合にすぎなかった。
- 問⑥ ジェファソン大統領（任1801～09）は連邦派の親英的外交を転換して中立政策を採ったので、対英関係が悪化、1812～14年の米英戦争の伏線となった。
- 問⑦ ジャクソン大統領（任1829～37）は資本家層の特権の抑制をはかり、白人男子の普通選挙制などを通じて、北・東部の小市民や南・西部の農民など庶民の政治参加に貢献し、民主主義を押し進めた。
- 問⑧ ストウ夫人の著作『アンクル=トムの小屋』は、人道主義的な立場から奴隷制の害悪を描き、奴隷制廃止に向けての世論に大きな影響を与えた。
- 問⑨ 1896年の大統領選挙で、人民党は民主党と提携して共通の候補者を立てたが、結局、共和党のマッキンリー（任1897～1901）が勝利を取めた。
- 問⑩ フランスでは1901年、右派勢力の台頭やドレフュス事件をきっかけに、中産階級を主体に進歩的な共和派が集結して急進社会党を結成した。
- 問⑪ 社会民主党の指導者であるブランド（任1969～74）は「東方外交」と呼ばれる東ドイツ・ソ連・ポーランドとの和解策を展開し、緊張緩和を進めた。

**【配点】**（計22点）

問①～問⑪ 各2点



会員番号	
------	--

氏名	
----	--